

【 飛行機雲の役割 】

郷愁を誘う秋晴れの青い空に、ぐんぐんと上って行く真っ白な飛行機雲について、天気のことわざがいくつかある。

「飛行機雲が消えずにしばらく残るときは天気が下り坂」

「飛行機雲が5分以上消えないときは雨となる」

「飛行機雲が大空に10ぐらい見えるときは翌日の天気が崩れる」

飛行機雲は凡そ2種類ある。まず、時速1,000キロ近いスピードで飛行している時、翼の後の気圧が下がる断熱冷却で生じる雲。次に、航空機のエンジンからの排ガスが低温に触れて出来る雲。何れも、上空の水蒸気量が多いほど雲粒がたくさん発生して、雲は消えずに広がっていく。

さて、悪天候をもたらす低気圧や前線は、暖かい空気と冷たい空気とがぶつかって発生する。日本付近では、上空の偏西風に流されて、おおむね東から北東方向へ移動していく。

低気圧や温暖前線の進行方向の前面700~800^{hPa}付近には、飛行機雲と同じような上層の雲が現れる。この雲が低気圧の進行によって、次第に厚く、全天を覆い低くなって天気が崩れてくることが多い。

それは、上層の大気中に湿気が増してきていることを表している。飛行機雲は上層の雲が現れる前に、ジェット機による人工的な空気の攪乱や排ガスによって、強制的に作られた雲といえる。

おなじみの天気予報の解説などで使われる高層データは、日本時間の午前9時と午後9時の2回、ロケットで観測している。一方、飛行機雲は上空の湿り具合を判断できるリアルタイムのセンサーの役割を果たす。農作業の合間に、時には空を見上げて飛行機雲の変化をチェックしてみると良い。